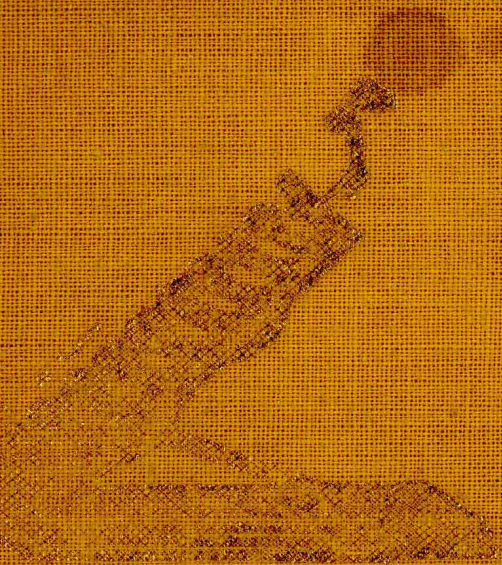




著者略歴

一九四三年生

東大仏文科大学院修了

明治学院大助教授

主要著書

「シュルレアリスムと芸術」

「幻視者たち——宇宙論的考察」

「ナジャ論」

「映画の「季節」

「宇宙模型としての書物」

主要訳書

ブルトン「ナジャ」「ナジャ——著者による全面

改訂版」「失われた足跡」「シュルレア

リスム宣言——溶ける魚」

ドーマル「類推の山」

マンズール「充ち足りた死者たち」

ワルドベルグ「シュルレアリスム」

アルキエ「シュルレアリスムの哲学」(共訳)

エルンスト「絵画の彼岸」「百頭女」

フリーエ「四運動の理論」

シュルレアリスムと小説

定価二三〇〇円

一九七九年二月七日印刷
一九七九年二月二十五日発行

著者 〇 巖 い 谷 や 國 志 お

発行者 中 森 季 雄

印刷者 田 中 昭 三

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話東京(廻)七八二一(代)

振替東京九一三三二八

郵便番号一〇一

理想社印刷・黒岩製本

(分) 1098 (製) 73180 (出) 6911

箱・見返し・扉 印刷 精興社

シュルレアリスムと小説

瀧口修造に捧ぐ

シュルレアリスムと小説

巖谷國士

白水社

裝幀
加納光於

シュルレアリスムと小説／目次

アルフレッド・ジャリと『超男性』 9

ギヨーム・アポリネールと『虐殺された詩人』 31

フィリップ・スーポーと『流れのままに』 55

ロベール・デスノスと『自由か愛か!』 79

アンドレ・ブルトンと『ナジャ』 101

アントナン・アルトーと『ヘリオガバルスまたは戴冠せるアナキスト』 131

ジョルジュ・ランブールと『ヴァニラの木』 157

ルネ・ドーマルと『類推の山』 179

ジョイス・マンズールと『充ち足りた死者たち』 205

★

小説のシュルレアリスム——展望の試み 233

★

書誌 253

あとがき 273

——
装幀 加納光於

アルフレッド・ジャリと『超男性』



Alfred Jarry, par Lucien Lantier

およそアルフレッド・ジャリ（一八七三—一九〇七）という作家におけるほど、芸術と実生活とが緊密に結びつき、不可分の一体をなしていた例は珍しいにちがいない。彼の伝記は今日まで、どれをとってもほんとう、い、か、思、わ、れ、な、い、よ、う、な、数多くの奇行の記録として語りつがれてきた。その法外な飲酒癖に関するもの、ピストルや自転車への偏愛に関するもの、異様な服装や住居や言葉づかいに関するもの、悪趣味と韜晦とスキャンダル癖に関するもの、はたまたなかば公然たる女ざらい—ナルシズム的傾向に関するもの——等々の逸話がありあつまつて、すでにおなじみの、あの例外的かつ典型的な人物像ができあがっているわけだが、それらはどのひとつをとっても、彼の作品世界と有機的に関連しあっていて、私たちはその一端に触れるや、ただちに複雑な全体へと引きこまれてしまう仕儀となるのだ。彼はいわば彼自身の文学を演じ、彼の文学はいわば彼自身を演出していた。これはほとんど切れ目のない往復運動であつて、どちらの面から出発しようと、あるいはどんな細部から出発しようと、私たちはいつもそこに、ナルシシクな円環をなして自立するジャリ自身の作家

人格を見出さざるをえない——といった事情があるわけである。

このような書きはじめかたをすれば、多くの読者は、まず何よりも、ジャリとその主人公ユビュとの関係を思いうかべることだろう。一八九六年十二月十日(ジャリ二十三歳)、パリのウーヴル座に最初のユビュ親爺が姿をあらわし、近代世界における「粗野な神」の地位におどりでて以来、ジャリは「永遠が彼を彼自身に変えるごとく」ユビュその人となり、ついにはみずからの創造したこの登場人物によって逆に創造しなおされるという、奇妙な倒錯的關係を生きはじめたのだった。じっさい、彼の日常におけるユビュ演技は度を越したもので、ほとんど疑似自殺とも言える悲劇的側面をふくんでいたらしい。しかしこれは同時に、ユビュという無二の理想型の定着によって、ジャリの人格に、どこをついてもけっして破綻をきたすことのない、堅固な柔構造が与えられたことをも意味するのではなからうか。ユビュUBUの名はそれ自体ユビック(遍在的)であり、しかも円環をなしている。そこにはたとえば、野卑から繊細へ、正気から酩酊へ、冒瀆から敬神へ、真面目から悪戯へという、まったく正反対の各項のあいだの往復運動をくりかえしながら、混沌のうちにたゆとうなにやら宇宙的な球体——ロートレアモンのいわゆる「大いなる独身者」(『マルドロールの歌』)にもかなう、失われた自己同一性への郷愁さえ読みとれるのではあるまいか。ユビュをめぐる芸術と実生活との一致は、ジャリにとって、みずからそのような円環的普遍人格と化する

ための契機だったとも考えられるのだ。

ところでこの『ユビュ王』から六年後に発表された小説、もうひとつの代表作である『超男性』の主人公とジャリとの関係についても、やはりこれと似たことが言えるはずなのである。ジャリ自身がすでに（少なくとも）一種の超男性であったことは、たとえば彼の生涯の重要な証人のひとりだったラシルド夫人の著、『アルフレッド・ジャリまたは文学界の超男性』（一九二八年）のような回想記からも知られるところだ。ことに「碩学にしてスポーツマン」と題されたそのうちの一章には、精神と肉体の両面において、ほとんど機械仕掛けのようにエネルギーで精確無比な、まさに「スーパーマン」の雛型然とした神童のイメージが定着されている。生れ故郷のラヴァルからサンブリュー、レンヌ、そしてパリへと、各地の高等中学を転々とした少年ジャリは、どの学校でも万能の秀才ぶりを発揮し、楽々と全科目にわたる褒賞をせしめたものだった。「じつに多くの知識を吸収して、文字どおり知識にあふれかえていた」というわけだが、この優等生が他方では、稀代の腕白小僧でもあったことに留意しなければなるまい。正規の年齢以前に、これも楽々とバカロレアに合格。高等師範進学の準備のために通ったアンリ四世校での同級生の話によると、彼は毎晩ほとんど眠らないで過ごし、それでいてつねに余裕綽々、あそび半分で万巻の書を読破しつつ、同時にどこからか、実生活上のあらゆる技術や知識を仕込んでいたという。小柄だががっしり

した体格のこのブルターニュ人は、もちろん生れながらの闘士、精力あふれるスポーツマンでもあつて、フェンシングや魚釣りや自転車や、さらにあの有名なピストルにいたるまで、何をやっても人間わざの限界に達しなければ気がすまなかつた。いやこれはスポーツにかぎったことではない、勉強であれ、詩作であれ、あるいは性生活であれ、食（飲？）生活であれ、彼にあつては一切が限界への挑戦、「記録」樹立の精神につらぬかれていたのだつた。

一九二四年の『シュルレアリスム宣言』のなかで、「アルフレッド・ジャリはアプサント酒においてシュルレアリストである」と述べたのはアンドレ・ブルトンだが、シュルレアリスムがジャリの文学的業績よりもまず生きかたのほうに、重要な何かを見ていたことはこの言葉から明らかだろう。ラシルド夫人によれば、「ジャリの一日は二リットルの白葡萄酒を呑むことからはじまつた。十時と正午のあいだに、三度にわけてアプサント酒、つづけて昼食には、魚あるいは肉とあわせて赤あるいは白の葡萄酒と、交互に何杯かのアプサント酒。午後はコーヒーにマール酒か、その他名前は忘れたが各種アルコールをまぜて数杯。さらに夕食には、もちろんいろいろと食前酒をやつたあとで、産地・銘柄を問わず少なくとも三本の葡萄酒を飲みこたえていた。ところで私は彼がほんとうに酔つたのを見たことがない。いや一度だけあるにはあつたが、そのときも私が彼の拳銃でねらいをつけるふりをする、彼はたちまち酔いからさめたものだつた」。ジャリにおいてはこれほど多量の酒でさえ、どう

やら意識の増進にしか役立たなかったらしい。いや、それよりも、彼は他のすべての場合と同様、このほとんどスポーツと化した飲酒の習慣によって、正気と酩酊の境界が失われる状態をこそ、執拗に追い求めていたのではなかったろうか。

いずれにしても、以上のような逸話から漠然とかたちづくられてくるのは、なにかそれ自身が一個の機械でもあるかのような、周到にくみたてられた怪物的生命の印象であるだろう。そう言えばユビュ自身、その原型はマリオネットだったけれども、私たちはいまやここで、さまざまな逸話の次元を超えて、人間よりもさらに精巧な人間であるところの機械人間、あるいは「人間人形」とも言うべき未来派的イメージにまで接近しているのだ。そしてこのイメージがやがてジャリ個人をはなれ、つまり一種のといった限定を不要とする普遍人格として生きるのを見ると、私たちははじめて作品『超男性』の世界に歩を踏み入れることになる——と言えるのではないだろうか。人形劇風のノンセンスにみちた逸話の集中点に、一切の底を流れる宇宙的自我に目覚めたかのような、二十世紀ヒロの原イメージがほの見える。こうしてユビュの場合と同様、ジャリとその主人公「超男性」とのあいだに、私たちはいよいよ、おわりのない印象の交換を実感しはじめることになるわけだ。

ラシルド夫人がいみじくも要約しているところでは、「すべてが彼にあっては機械的だった。そして正確きわまる機械として人類にみずからをおしつけることこそ、彼のものっぱら要